

村野次郎創刊

# 香 蘭

二〇二〇年(令和二年)六月一日発行(毎月一回一日発行)

香 蘭

第九十七卷第六号

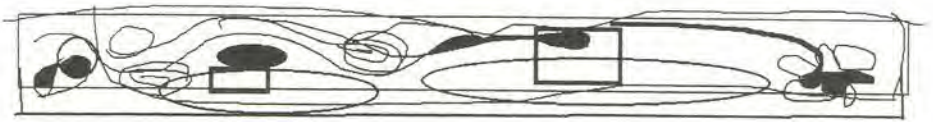


2020年(令和2年)6月号

第 97 卷

第 6 号

通卷 1074 号



# 香 蘭

2020年(令和2年)6月号  
第97巻 第6号 通巻1074号

## 目 次

	村野次郎作品 私の愛誦歌(58)			
	作品一 特選	石井・西野・水本・榎・鈴木(桂)	高橋登喜	表二
	作品二、三 特選(四月号)	白井・江口・中村(か) 岡野・庄司・竹本 田中・中村(陽)・馬場・俣本・山本(武)	牧田明子	2
	近詠十五首 「紅鮮らけし」		牧田明子	4
	作品			6
	一			8
	二			24
	三			32
	推薦香蘭集			39
	香 蘭 集			40
	村野次郎への旅(123)		千々和久幸	20
	社告「香蘭基金」につき改めてのお願い			22
	歌の生まれる場所(89)		渡辺君子	23
	七首 抄(四月号)	市川・小林(ま)・渡辺(と)・小原	元子	46
	エッセイ・自由研究 「徒然なるままに」		岡野道子	48
	焦 点(四月号) 「食に係わる歌」		丸山三枝子	50
	作品一 特選欄評(四月号)		伊藤美恵子	52
	他誌拝見 114		平川良枝	54
	近詠十五首 「うすら日のなか」 評(四月号)		伊藤静子	55
	作品一		香山静子	56
	作品二		伊藤藤子	58
	作品三		黒羽慎子	60
	香蘭集		河野真二	62
	緑 地 帯	脇谷・白井・野和田・柏原(真)・加瀬	田中あさひ	64
	文法あれこれ(13)		長野道子	68
	他誌拝見 特別篇			70
	他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向			71
	歌会及び会合・会員消息・他			76
	編集後記・新宿日記			77
	表紙絵	中村 陽子 「重なり合って」		78
		目次・緑地帯カット		79
			和田和雄	80

街に住み親しむこともなかりつる秋空はれて

雁わたる見ゆ

『夕あかり』

この街に住みながらも街を愛して出歩き遊ぶこともない。でも、秋ともなれば空は晴れわたり、雁が渡るのがこんなに良く見えるよと。

非常に分かりやすく気持のいい大らかで清潔感があるので好きである。昭和九年の作で、小題「街空の雁」の二首目の作品である。

今回この歌を再度読んでみた。えっ作者は一体どこにいるの？ ビルの五、六階の窓から見ているの？ 下句は実景なの？ わざわざ「見ゆ」と言うの？ ツーピースの歌？ こんな疑問が次々と出てきた。

が私はこの歌から離れられない。「親しむこともなかりつる」がこの歌の重みとなっている。それである時ふと気づく。「見ゆ」これは実景ではなく心象ではないかと。心象であると思いつつてから、なお好きになった歌である。

〔夕あかり〕190頁、『村野次郎三百首』17頁に所収

## 四 選 者 の 作 品

歌集を編む

平塚 千々和 久 幸

八年ぶりに歌集編まんとわが歌を矯めつ眇めつして時を遣る  
誤字脱字仮名遣いなど間違いの出でくるたびに己を叱る

文法の間違い数カ所正されて校正ゲラが戻されてくる

目を通すたびにイメージが跳ねてゆくわが歌にしてなお持て余す  
けつきよくは普段着のままていくほかはあらず利口な歌など詠むな  
なまくらなわが人生の断片を集め慰まぬ歌集としたり

半分は捨てるべきだった 歌集手に真つ先に思いしはそのこと  
いつの日か妻が読むことあらんかと今は儂きことを思える

長男の妻

横浜 渡 辺 礼比子

疫病の蔓延れる春 姑<sup>はは</sup>転び友が離婚し姪母となる

浄めたる手に入院の書類書く病院備品のペンは使わず

入院の書類に記す統柄のそうか、私は「長男の妻」

「遅いから帰って」姑<sup>はは</sup>が喘ぎつつ言えり救急診療室に

時かけて書きし歌集の礼状にくくあつさりと返事かえり来

でもです、言わんとしつづ言いそねぐづつと飲み干す爽健美茶を

〈相続は法律通りに〉淡々と会食終えて駅頭に散る

ネット見て焼く塩味<sup>ケイキ</sup>ケーキ 疫病の流行りてパリはますます速く

右往左往

鎌倉 香山 静子

はびこれるウイルスとやらに威されて右往左往の日本列島  
ウイルスに阻まれ歌会はまた中止 あゝ、春の弥生は芒々と過ぐ  
ウイルスに戸惑ふ街を覆ひたる弥生の雲は微動だにせず

景気後退の憂ひはあれどひとまづはあれやこれやとコロナ対策  
コロナ患者の増加に外出控へよとふ はいはい私は高齢なれば

ともかくも今日の外出は止めにしてブルーストの本を読むとしようか  
ブルーストの分厚き本をバタと閉づ さて昼食は何にしようか

出来立ての鯛焼店頭に並んでるやつぱり食べたい「一つ下さい」

春 一 番

我孫子 丸山 三枝子

にんげんと春一番のうずまける渋谷スクランブル交差点

観祭がそこにあるから仕事終え明るいうちから酌みいるわれら

言いたきを言えと告げられ口ごもる言いたきことは言うべくもなく

服薬のために食べると言いながら朝昼晩と食べすぎている

つれあいが病気になればワイン断ちわれ神妙にごはん平らぐ

結石を託つ夫に崎陽軒のシウマイ弁当買って帰りぬ

常磐線車窓にひかる江戸川を小舟ゆくなりさざなみ立って

舟がゆきその水脈<sup>みづな</sup>がゆく上空を鳶はすかいに過りゆきたり



# 作品一特選



(五選者共選)

カロリナポブラ 習志野 石井雅子

一枚のティッシュを箱から抜くときにかすか滲める後悔ありき  
風のうた聴きつつ歩む岸辺みちカロリナポブラいまだ芽吹かず  
青サギと小サギが並びとほく見てやがて枯れ葦のなかに入りゆく  
コロナ禍にひきこもりの日々<sup>に</sup>頂きしレモンの黄は希望のように  
パンデミック・クラスタ聞きなれぬ言葉も運ぶコロナウイルス  
青春のケンとメリーに手をふつて愛車は廃車免許返納  
ああこれはパラレルワールド夫亡くし私の歩む世界がズレて  
最期の言葉 東京 西野 美智代  
たれかれの見舞は潔しとせず後は二人でよろしく頼む  
野田岩の鰻を食べに行きたいね食ひ気があるから大丈夫だよ  
みつともない姿さらすは真つ平だ三代続く江戸つ子だもの

その時はワルターの『田園』かけてくれ 発作の度に幾度も聞き来し  
駆けつけし子に目を向けてご苦労さん 此の期に及び余裕を見せる  
けふはもう疲れた早く眠りたい気を付けてねとわれに言ひけり  
看護師に昨夜は面倒かけました面目ないよが最期の言葉  
アンデルセン広場 倉敷 水本 美恵子  
ブロンズのアンデルセンの男たち腕組みて立つ倉敷駅裏  
残されしブロンズ像はありし日のままに帰らぬ「倉敷チボリ」は  
春めけるあしたの雨にひと息に蒼ほどけてラッパ水仙  
新聞紙につつまし白菜がほの暗き箱の中にて花をいだけり  
目に見えぬコロナウイルスに沈みたる大気押し上げ白木蓮咲く  
いづくまで行きしか夫のポケットの椎の実十粒つやつやとして  
袴とる土筆の灰汁に指先をそめて今年の春をいただく  
春一番 長野 榎 恒子  
樹から樹へぶつかりゆける春一番雨をしたがえひと日騒がし  
春近し懸命に咲く山茶花よ何とあたたかき色見せて咲く  
懸命に毛繕いする猫のいて夕べはそこより闇ふかくなる  
気にかかること一つぞ筆まめな彼女から賀状二年きたらず  
少女期は母似と言われし我の顔鏡に向けば老いたる父なり  
あの日龍となりし千曲川 泥畑横目に今日は陽射しおだやか  
亡き夫を仏にあずけわが心なごむにあらぬ日々続くなる

春、三月

西宮 鈴木桂子

勤めより夕べを帰るスーパーの夕餉の弁当二つを提げて  
休校の娘と母ならむコンピニのおにぎりの前顔よせあふは  
閉めきりしままなる窓をひとつづつ開け放ちゆく春の来たれば  
光降る街へ出でゆく三月は希望の欠片<sup>かけら</sup>落ちてゐぬかと

寮生活五年の期限せまる娘が出ないですむ策を我に問ひくる  
〈貧困〉と延長希望に書かせたればいたく同情ありて許可さる  
子とふたり春のたこやき食べながら窓にさくらの花を見てゐる

涅槃しぐれ

豊中 城 富貴美

人間に何おこらうと生駒山を引き上げること昇る太陽

疫病に休校となりし児童らが繁みに基地などつくりて遊ぶ  
寒きとてけふも寺へと向かふ途を涅槃しぐれかわれに降りくる  
桜もち草餅そなへ彼岸会のあなたに春のかをりが届く

置物と思ひし猫が動きたり 春の陽させる嵌め殺しの窓  
疫病に延期となりしオリピックみつぎ師在らば如何に詠むらむ  
街路樹の桜しみじみ見上げれば薄ももいろのつぼみ膨らむ

ちいさなラジオ

東京 坪 裕

真つ直ぐに人生進むはずもなくさ迷いながら老いてゆくなり  
剪定のされてしまつてバカみたい今年のさくらパラパラと咲く  
几帳面は俺のとリエか取り敢えず五分前には着いているなり

煌煌と光り輝く駅ナカを過ぎて寂しき町に消えたり

おもいきり腹の底から泣き叫ぶ赤子はきつと丈夫に育つ

午前二時の時報聞きたり妻ねむる枕のそばのちいさなラジオ

内臓を強くしほりていでし糞を始末している犬ばかりである

本殿に春

町田 牧野道子

ふたりして宮司が難段かざり終へ靖国神社の本殿に春

われの知る神楽坂などもうなくて風にのりくる異国のことば

子どもらはどこに消えたか三月のなかばの校庭さくら膨らむ

桜餅に抹茶を入れて観客のない春場所を結びまで見る

公園のさくらが開花 ベンチには一メートルを空けて座らな

異国へと迷ひ来たるかこの朝横須賀の海だあれもゐない

春霞む沖ゆく船に再びを留学の夢かたりだす夫

これが日常

福岡 森田 徹

寝て起きて食べて近くを散歩して危うき老いのひと日が終わる

老いたれば卑屈にならずシンプルに決めたることを繰り返すなり

コロナウイルス対策なればと部屋籠りありていに言えよこれが日常

だべりあい公園までを散歩する人はおらずや月に二、三度

パンデミックの報道までも聞こえてわが日常も少しざわめく

杖つきて街を歩けば追い越せる人ばかりなり幼きもまた

近寄りて語り合いたき人もなく街角の信号赤に変われり

# 作品二、三特選



(四月号作品から)

千々和 久幸 選

## 〈作品二〉

予 感 長野 白井 紀代子

急くように日の暮れたれば遮断機の鉦かねの音にも追いかけるる  
トンネルの中に現実ひとつずつ落としふわりとふるさとに立つ  
今日かぎり俺は空なんかやめてやると叫んでいるかのような夕焼  
ひとつずつ悲しき注文持ち寄りて午前零時の神を囲めり  
どれほどの見世場の多いドラマよりドラマチックな箱根駅伝  
雪白の粥にちらせば七草の緑に癒ゆる日の予感あり  
・機智、比喩を上手く使って現実から少しく身を起こした。

カナダ御一行様 柏 江口 絹代

ごはんつぶひと粒ひと粒がひかり帯び真珠と思う節子さんの米  
鎌倉の秋の日の射す禅寺の伽藍の屋根に白猫のおり  
カナダから帰り来し子ら正月にコーンフレークをサクサクと食む  
晩秋の雨の降りいる禅寺の石だたみ行くガム噛みながら  
ともかくも正月の過ぎ鴉鳴く生ゴミ置き場にゴミ出しにゆく

いこいこと江ノ電に乗って江の島にカナダご一行様と旅する師走  
・巧まざるユーモアが読者の心を豊かにしてくれる。

も し 福岡 中村 かよ子

永遠がもしもあつたら人類は滅びたくつてうずうずしたろう  
もし花に意思があつたら側に咲く花を最初に憎んだだろう  
手袋を脱いで晒した左手に風と光が遊び始める

本当かどうかはさほど重要じゃないと歴史書にはあるのだが  
自分さえいつかは騙せる嘘をつけ単純な嘘それが肝心  
人生初というがまだあり何気無き暮らしの中に肋骨を折る  
・自分を含めた社会や既成概念を疑う所にこの作者の詩の契機がある。

ナンクルナイサ 尾道 岡野 甫江

空港の荷物検査にこぼれ出で歳時記だけがベルトに運ばる  
オスブレイ空に飛び交ふ沖繩の地をゆるゆるとモノレールゆく  
この青に嘗て魚雷も潜みしか 冬あたたかき糸満の海  
広島から来たと告ぐれば戦災の同志と言へり売店の人  
沖繩の旅の記念のTシャツのナンクルナイサ文字の白抜き  
鳥ことは一つ覚えて帰るなりナンクルナイサは何とかなるさ  
・旅の最後に拾ったひと言「ナンクルナイサ」が、軽妙な一連を生んだ。

## 〈作品三〉

新春の風景 横浜 庄司 健造

新春の赤城おろしに纏つぐニューイヤー駅伝 親子草  
おちこちに空席ありて新年の歌会はしずかにすすみてゆけり



おだやかに正月終えん七草の粥のすずしろ齒ざわりよろし  
水仙の百円一束がむぞうさに置かれてありぬ無人売場に  
国旗たつ議員事務所は切切に令和を託すか一月一日

・自らの身の丈、肉声で銜いなく詠んだところに共感する。

化粧室 千葉 竹本 幸子

正月の七福神巡りは雨のなか文句を言いつつ御利益願う  
デパートの仕事帰りの化粧室疲れた女がつぎつぎに来る  
新型のコロナウイルス流行りおりもつと恐ろしげな名前を付けよ  
焼芋を焚火でするは昔にてわが家はレンジで八分待てり  
「羨む」といういらぬ荷物を降ろしたら何と身軽ですがしい気分

・ま正面から詠んで、いずれも輪郭鮮明で歯切れの良い歌。

春営み 東京 田中 あさひ

若水を汲みねんごろに嘸みくだしことば清めよところを清ます  
ひとり点もたのしからずや枇杷色に熟れつつわたるにひどしの月  
無一物にて生まれこしわがうちに裸身の月をながく棲まはす  
満ちてくる潮を待てりにひどしのわが半月を息づかせつつ  
町内の春営みのさがけは素心臘梅の満身の花

・猥雑な世俗の向こうの静謐な声に、香蘭人はもつと耳を傾けるべし。

窓は夕映え 東京 中村 陽子

きつぱりと決められなくても良しとする夕焼け空のグラデーションよ  
変人と思われてもいい年齢と絵の師に言われる 窓は夕映え  
今日何度言いたきことを飲み込みしか赤い椿が一輪咲きぬ

雨上がりの煌めく樹を見るこの一瞬われの瞳は清らかなりや  
集積所のベットボトルは網のなか重なり合って落ち着いている  
・特異な着眼が読者を遠いところまで連れ出ししてくれる。

薄目して 松江 馬場 美信

なにもかも優柔不断の夕まぐれ老女のピアス「パブリカ」を聴く  
ためらわずここを曲がろう裸木であの日のように佇む桜  
久々にロールキャベツを食べたいと驟雨降る夜メールが来たり  
さやさやと眠るわが犬 僧帽弁閉鎖不全と告げられ十月  
寝息たて眠る鼓動を確かめる 薄目して見るふりをする犬  
・奔放な飛躍が意図しなかつた世界を探り当てている。

暮・正月 長野 俣本 貴美子

大晦日娘等来ると知らせ受け狭窄症に痛む身忘る  
正月のお花を飾り掃除して一人ぼっちの暮し忘るる  
元旦は家族六人揃いたり料理自慢の息子活躍  
女孫大学生となりたれば婆は話の外におかるる

・満身創痍の身を支えているのは、作者の楽天的な向日性である。

新年 福岡 山本 武子

張り切つて作る雑煮に自信あり共に喜ぶ夫は亡けれど  
年始め息子運転ヨメムスメババも揃って元旦礼拝へ  
ペランダの隅に野スミレ一輪が自分勝手に春ですよと咲く  
独り居の吾を遊ばせ学ばせて今日消えてゆくウインドウセブン  
・自己戯画の中に老いを楽しむ日々が活写されている。



# 紅鮮らけし

牧田 明子

勢ひて降りくる雨はひと色に如月の街をすつぽり包む

冒険などしたこともなく手花火の散りゆく内にちまちまと生く

脚ほそく折りて仕上げる千代紙の黒は強こほごは鴉となりぬ

百均の木に止まりゐる嘴はし太鴉は生々なまなまとして肉感をもつ

食器あらふ手に開きたるケータイは文字せいぜんと友の死を告ぐ

転移した癌と聞きしにいつかはと、庭の水仙うつむきて咲く

駅よりの階くだりゆく喪の服に二月の雨はあつまりやすし

軒下に手を濡らしつつたたむ傘 夜がぐーんと窄まりてくる

生も死も分かたず容るるこの宙そらに友とわたしと背中あはせなり

同級生を再会させて友ねむる柩のなかの紅鮮らけし

泣きじやくるその孫幼くどれ程の想ひのこして友の逝きしか

ひと言随想

同級生

不在とふ大きな穴を埋めるべくビールはグラスに注がれてゆく

お浄めの塩に指先汚しつつ学舎に鳴りし風音を聴く

光りつつ小花つらなる雪柳の傾くままに季節のうつる

ゆつくりと茜の解くひとひらの雲でありたし明日のわれは

同級生の友の死を知ったのは、二月の寒い朝であった。ここ数年往き来するうち親交を深めていった。北海道の友を迎えてのみなどみらいの散策など懐かしく思う。そんな折、突然、癌での入院を知らされたのだった。生来明るく物事にあまりこだわりを持たない性格と思ってきたが、いつまでも続く抗癌剤治療に不審を抱えつつその心中は、如何許りであったかと思うにつけて胸が痛むのである。

思えば出会いは戦後の小学校であった。当時二部授業等が行われていたが、皆元気でいじめ等はなかった。父親の戦死した少年は、早朝の新聞配達で授業中眠っている事もあったが、先生も誰も何とも言わず、みんな仲間であった。そして、みんな貧しかった。今、クラス会では何ちゃん、何ちゃんと呼び合っている。そんな仲間の一人が欠けたこと、心は収まり難いがこの夜、歌に書き留めた。

「ザムボア」と次郎 (十五)

前回に引き続き、「ザンボア」(朱欒) 第四卷第五號の「別れの言葉」の後半を引く。

眞に短歌の形式によらなければならぬ人は短歌に據るがよい。私自身には別途に出でなければならぬから、去つて他に就くのである。尤も全然短歌を棄てるとは云はぬ。時をり古い心に還つた時、古るい言葉が戀しくなつた時、私は故巢に帰つて歌ふかもしれぬ。然しそれは短歌を能、謡曲、古謡その他の閑散な慰藉を求めるが如くに求めるであらう。

ただ主として全力を現代語の新詩ならびに短歌俳句に代るべき新短詩の創造に向つて専らにする。

私は新らしく立つ。

ただ一時の寂寥を悲しんで、私を引留めてくれるな。

眞に私を愛するなら、私のけなげな覺悟を

千々和久 幸

鈍らしてくれるな。

私を一人にしてくれ、私は一人で行くところまで行つて見る。而して斃れたら斃れるまでだ。

短歌は尊い。草舎は戀しい。諸君は諸君でその道に執してくれ。執しなければ去つてもよい。草舎にのこる諸君はこの上とも歴史ある私と草舎の遺業を繼承して、堅固に己れの本分を守り『ザムボア』の匂高い名を愈高く深く匂はしてくれ。決して汚してくるな。

私は諸君を愛した。愛しつづけた。今でも深く愛してゐる。

然し、これ以上云ふのは未練だ。

私は別れる。

諸君。愈お別れだ。

これが愈お別れだ。  
私は去る。

私は深く、而して静かに静かに去る。  
寂しい、寂しいがしかたがないのだ。  
私は去る。

大正七年六月六日

小田原十字お花畑にて

白秋の悲痛な叫びを聞く思いの文章だが、同時に何か切羽詰まつた苛立ちも聞こえてくる。「別れの言葉」ではつきり読み取れるのは、次の三点である。

①私は詩人である。宗匠ではない。私は私の詩を以て敢て天下万人の靈たらむ事を希求する。

②更に私の諸君と別るる理由の二は短歌そのものに就いての私の疑義である。否、私は短歌の別途に出でんと欲するからである。

短歌は古い。尊い。けれどもその形式は既に古い。

③私は短歌形式以前に全然別個の現代語の新短詩の創造に向つて進む。既に四年前私は此の爲め眞珠抄の短唱を作つた。



白秋は『雲母集』以後の自らの短歌に行き詰まっていたのだ。それをあっさり言つてしまえば、『雲母集』から七年の間を置いて企図された第三歌集『雀の卵』の、産みの苦しきというところになろうか。紫烟草舎の解散はその苦しみの中で発意されたものである。

この間の事情を三木卓は評伝『北原白秋』(筑摩書房、2005年)で次のように述べている。

ここには誇張も、関係者への言い訳もあるだろう。白秋自身も「気負い」という言葉で解散の辞の調子を弁解している。だが、白秋が、この三部からなる『雀の卵』のために時間と労力を大いに費やしたことは事実である。そのためもあつてか、弟の阿蘭陀書房も倒産の憂き目を見た。(中略)

『雀の卵』には、それまでのような、外部世界から衝迫を受けて危機に立っている詩人の姿はない。詩人のうちでは言葉が先行している。表現論が先行している。

わたしは表現することをずつとしてきた人間だから、そういう白秋の在り方を無闇に否定しようというものではない。『雲母集』まで

のかれの仕事は、かれ自身が意識しているようにそれだけですごい仕事だった。一人の人間の生命力の消費量として、それは異常ともいふべきもだった。それがこれらの作品群を輝かせた。かれはこのままいけばそのエネルギーの浪費に耐えられないで、やがて死んでしまつたはずである。

しかしその手前で、かれは一段目の休息期を迎えたのだと思う。すでにかれは近代の詩歌において、ほかのだれもなしえなかつた仕事をひとつ、なしたたけたのである。

詩人白秋の生き方を、作品と私生活の両面から抉つて得た「(詩の)休息期」という把握に、また「このままいけばそのエネルギーの浪費に耐えられないで、やがて死んでしまつたはずである」という予言に、わたしは瞠目する。

三木の評伝は、「紫烟草舎の解散宣言」と「短歌訣別宣言」のあと、白秋の新短詩という志とは違う(正反対の)散文(小説)や童謡への方向転換を辿つている。

五月号は最後(40頁)に白秋の「再び」で

結ばれている。要点を抜き書きする。

愈々お別れです。

これで短歌を通じての諸君との個人的交りは自然に消滅して了つた。然し人間としての交りは愛さへあればいつまでも續けてゆけるだらう。(中略)

：私は幸に元氣である。章子もお蔭でよほど快くなつた。私は父母を小田原に迎へて女中と五人でくらし居る。

わたしの現在是非常に寂しい、寂しいが、それは澄みきつた安らかな寂しさである。何もかもから離れて一人になつて、静かに今は書を読み、詩を作り、また静かに思案してゐる。これが私としてのほんとうの生活だ。

(中略)なほ東京日日新聞の歌壇は私が直接に見てゐる。これは大した煩瑣なことでないので生活上見てやつてゐる。私の歌に關係してゐるのはこれ文であるので、直接の關係をつなぎたい人はひまびまにその方に投稿して下さいばよろしい。(中略)

終りに私は私が諸君を深く愛してゐたことを、なほ今後も蔭乍ら深く愛してゐることを諸君に告げる。諸君の健康を切に祈る。